

## Maple letter (19)

によぎによぎと入道雲が青空に広がっていきます。2～3年前までは、強い陽の照り返しに木々の葉が白い腹を出しても、連続する猛暑も入道雲もなかったのですが、北国の夏も気候の変化を免れないようです。

そんなある日、友人夫婦の家を訪れました。中に入ると、心地よい冷房、いえ、立ち並ぶ甲冑でひやーっと肝が寒くなります。ドリトル先生の叙勲ダイナーで30年ぶりに再会した友人の家です。セントローレンス大河のゆったりとした流れに沿った島の一隅にありました。三階だての家は、ガレージも改築され、どこからどこまで甲冑や刀剣や美術品であふれ、まるで美術館のようです。この島は、近年高級住宅地として開発され、銀行、学校、スーパー、レストランと全てが便利に整った優雅な一角になっています。

癌研究をして長い友人(サムライ博士とよんでおきます)は、近年は脳腫瘍の研究に専念し、どうやら画期的な、「脳腫瘍のトロイの木馬」(興味がありましたらインターネットで調べてみてください)と言われる治療法を発見したようです。ドリトル先生とサムライ博士の会話は専門的でとてもついていけそうありませんが、これで多くの人が救えるようです。癌関係の著作や癌予防の食材などの著書も多く、世界的に著名な研究者なようです。

サムライ博士は、ひところは「カンパイ」というトークショーもテレビでもっていました。かなりマルチな人です。それだけではありません。甲冑、刀剣など侍の魂のコレクションナーでもあるのです。その昔、一時期、剣道をドリトル先生とし、いけばなを奥さんと一緒に私の所でしていました。癌研究はプレッシャーやストレスが多く、その解消のため、コレクションを始めたようです。しかも、それも、徹底して。全財産をつぎ込んでしまったようです。プロ並みの知識も研究の合間に蓄えました。奥さんも夫につきあい、一緒に研究し、甲冑、刀剣、美術品の知識は夫同様プロ並みです。コレクションの説明は、まるで日本の歴史の旅をしているようでした。微に入り細に入り見事なものです。

「プレッシャーに立ち向かうのは、命に別状はないとはいえ、戦いみたいなものだからね。見てごらん、甲冑も刀剣も、全てが実に美的なんだ。綺麗なんだよ。吸い込まれていく。」  
というわけで、集めた鎧兜が35点、壁に掛けられた刀剣は数え切れません。このコレクションを10ヶ月間にわたり市の美術館で公開していたこともありました。

ドリトル先生もたちまちコレクションに引き込まれていきます。

「ちょっと、それには触らないで。」

ドリトル先生は、刀をを抜こうとしていた手を慌ててをひっこめました。

奥さんは、元医者で、一時期私のホームドクターだった人です。サムライ博士のキャリアのマネージメントのため、すっぱり医者の道は捨ててしまったようです。著名な研究者とはいえ、

子供のような夫の世話は大変で、二人でキャリアを同時進行は難しかったそうです。実に気の利く、優しい、茶目っ気のある女性です。

ドリトル先生とサムライ博士はそれぞれトップをいく人だっただけに、尊敬し合う分、ぶつかり合うことも多く、ある時から交流が途絶えてしまっていました。時の流れの中で、それぞれキャリアや趣味の道を達成し、年をとった今は、相互の尊敬だけが残っているようです。穏やかな充実した時が流れていきました。サムライ博士は教授職は退き、今は研究に専念しているようです。

「学生たちのレベルも下降の一途をたどっているし、学生に昔のような学ぶ情熱は見えなくなってね、そのせいもあって、もう教えるのも引き時かなあと思ったんだ。だいたい三分の一の学生は、学業には向いてないしね。親に言われて大学に来ているだけなんだよ。幸せそうには見えないんだ。大工であれ、自分に向いた仕事を選んで幸せになる方が良いんじゃないかなあと、つくづく思ってる。」

「でもカナダの教育は素晴らしいじゃないの。幸せな将来のためにも、皆にもっと勉強してもらっても良いかなあとと思うけど」

「和子、それは違うよ。幸せと学問は別だよ。確かにカナダの教育は素晴らしい。僕にしても、妻にしても、貧しい家に生まれてここまで来ているしね。勉強ができた、それだけで無限のチャンスを与えてくれたからね。でも僕たちの頃は、思春期なんて言って甘えてもいなかったからね。情熱があったんだ。」

生命の誕生から始まったドリトル先生とサムライ博士の会話は終わりが無いかのように、社会の現象へと移っていくのでした。

「ところで、そろそろ場所変えてレストランに行かない？」

サムライ博士の妻は頃を見計らって提案します。

「二手に別れていこう。僕の車に誰か乗らない？」

見ればBMWのオープンスポーツカー。

「僕が、生まれて初めて、欲しいと思った車なんだ。前は、乗れば何でもいいかなあと思ってたんだけどね。」

「若くないけし、ボインじゃないし、スカート丈も長いし、セクシーじゃないけど、乗せて？」

「もちろん。今日は目をつぶるから。」

ドリトル先生はチャーミングな奥さんと自分の車に乗り込み、車で5分ほどのサムライ博士行きつけのレストランで合流です。

ワインとお勧め料理でリラックスしながら会話はさらに続いていきました。サムライ博士との会話を楽しみながら、ドリトル先生はあどけないサムライ博士に向かってつぶやくようにこう言うのでした。

「僕はね、剣道から学んだ物が多いけど、間合い、この哲学は生き方にも応用していきたいと思ってる。つかず離れずかな。友情もそれが大事な気がしている。」

サムライ博士カップルとは長いお付き合いになりそうです。